LC
りぽーと
Vol. 38

〒663-8558　西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
TEL　0798(45)3536
FAX　0798(45)3574
http://www.mukogawa-u.ac.jp~ILC

ことばのサロン＆言語文化セミナー

今回のリポートは、第５回「ことばのサロン」と、第22回「言語文化セミナー」の開催報告です。これらは、言語文化研究所が主催する催し物で、それぞれ１年に１回開催しています。

「ことばのサロン」は、参加者が中心となる会で、全員に発言していただくことと、ことばで楽しんでもらえることとを一番の目的としています。今年度も、年代・性別・職業などに関係なく、参加者から興味深い話が飛び出し、研究所にとっても非常に有意義な時間となりました。

「言語文化セミナー」は、講師の話が中心です。参加者の中には、毎年のようにお目にかかる人や、「ことばのサロン」にも足を運んでくださる人があり、ことばを通してつながる“常連さん”に感謝する一日でもありました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

■第５回「ことばのサロン」　テーマ「誤解・曲解・勘ちがい」
2013年７月13日（土）午後１時30分～３時30分

【今回のサロンについて】

私たちは日常、互いにことばをやりとりして生活していますが、本当に理解しあっているのでしょうか。正しい日本語さえ使えば、コミュニケーションはうまく行われるのでしょうか。

今回は、的確なコミュニケーションを行うために、理解の問題を考えます。ただし、「上品なアマノジャク」を目指す立場から、理解の裏返しである「誤解・曲解・勘ちがい」として取り上げます。

過去に見聞きした「誤解・曲解・勘ちがい」の例を持ち寄って、なぜそれらが生じるのかをみなさんで考えたいと思います。

サロンは今回で５回目、このへんでお休みにしようかと考えています。

佐竹　秀雄

蒸し暑い日が続く三連休の初日、７月13日土曜日に、２時間の予定で第５回「ことばのサロン」を開催しました。今回のテーマは、「誤解・曲解・勘ちがい」です。

まず、佐竹から、音が似ている語や、ポーズ・読点の位置によって意味が変わる文など、日本語の性質によって起こる誤解について解説がありました。その後、参加者一人ずつ、自己紹介を兼ねて「身のまわりで起こった、誤解・曲解・勘ちがい」について話してもらいました。

関西では、「この本、なおしといて」のように、「なおす」を「片付ける」意味で使いますが、他の地方では、もちろん通じません。「えっと、どこを修理するんですか？」と聞き返されたという体験談が、まず出ました。

「何度聞いても、JRのアナウンスが分かりにくくて、快速と普通、どちらに乗っていれば、先に目的地につけるのかいつも迷ってしまう。アナウンスに合わせて、降りてみたり乗ってみたり」と、日常生活で困っている一コマを紹介した人もいました。

広島県出身の佐竹ゼミ生が紹介したのは、「実家の近所にはたくさんある名字なのに、関西では珍しい名字なのか、いつも間違えられたり、聞き返されたりする」と自分の名前についての勘ちがい話です。

佐竹ゼミのOGは、勤務先での客とのやりとりを紹介し、「バーゲン中は、値引き後の値段を表示していても、そこからさらに値引きされるのかと聞いてくる客が多い」と、大阪らしい一幕を紹介しつつ、頑張って働いていることを知らせてくれました。

企業経営者からは、「取引先との待ち合わせ場所や時間を、うまく設定できない新入社員がいる」という意見が、若干の嘆きと共に出ました。

それに対しては、テレビ局アナウンサーが、「ケータイが普及してからは、待ち合わせの約束があいまいになった。今は、目的地の近辺に着いたら、そこで再度メールで連絡し合うとういうやり方が普通になっているからでは」という解釈とフォローです。

そのほかにも、日本語教師、話しことばの専門家、元小学校教師、俳人など、その立場ならではの、誤解・曲解・勘ちがい話が出ました

その後、佐竹は「誤解や曲解・勘ちがいは、“ことば”のせいだろうか」と問いかけました。

参加者の話をまとめ、誤解には、ことばそのものというよりも、受け手の立場や期待、あるいは思い込みなどを含むその場の状況が大きくかかわっているのではないか。正しい日本語を使えば、誤解がなくなるかと言えばそうではないだろう。誤解なく、相手に物事を伝えるために、「正しい日本語」は手段であって、決して目的ではないはず。正しい日本語を使っても、誤解・曲解・勘ちがいが生まれて、伝わらなければ意味がない。それよりも、多少、正しくなくとも、「伝わる日本語」の方が価値があるのではないか、という提案で締めくくりました。

参加してくださった17名の皆さんは、今回のテーマに合わせて、新聞の切り抜きを用意したり、自分の体験談やニュースなどをノートに記したりと、ネタの準備がばっちりでした。皆さんの熱意をとてもありがたく感じました。

今回も、今までと同様、時間を少しオーバーしても、まだ話し足りないほど盛り上がったサロンとなりました。

■第22回「言語文化セミナー」
2013年12月７日（木）午後２：00～４：00
講師：佐竹　秀雄（本学教授　言語文化研究所長）
テーマ：将来の書きことばスタイル

【開催にあたって】

30年以上も前、若者たちの書きことばの中に話しことばの要素が流入しはじめました。その影響を受けた書きことばの文体は、かなりの変化をとげました。その変化のようすを概観するとともに、その理由や意味を探ります。そして、将来の書きことばのスタイルはどうあるべきなのかを考えたいと思います。

佐竹　秀雄

１．新しい書き言葉の出現――「新言文一致体」

1980年当時の若者雑誌、『平凡』『popeye』『an・an』『non・no』などを調査した結果、新しく出現した書き言葉について、佐竹は「新言文一致体」と命名しました。「新言文一致体」の印象を「片仮名の多さ」「造語法の手軽さ」「働きかけの表現（要求、勧誘）」であるとし、その本質的特徴を「話し言葉調」（話すように書く）であるとしました。

2.「新言文一致体」の広がりとその特徴を示す用例

「新言文一致体」は、上記の雑誌だけではなく、さまざまな書きことばに見られます。たとえば、「「いわさきちひろ美術館」の感想ノート」や、「ジュニア小説作家へのファンレター」、「ジュニア小説」などです。これらには、「言い直し・言いさし」「省略・遊び言葉」「融合形・流行語」といった話しことばに特徴的な形が現れ、「終助詞」にも話しことばで使われるのと同じ形が現れるという特徴がみられます。

3.「新言文一致体」の量的構造・既存データとの比較

次に、「新言文一致体」の文章を計量的に調査した結果を示しました。項目は、「品詞の比率」、「語種の比率」、「文の長さ」、「指示語の比率」、「働きかけ文の比率」、「表情語（オノマトペ）の比率」などについてです。これらの調査結果の数値を既存のデータと比較しながら、「新言文一致体」が、話しことばに近い構造をもっていることを量的にも明らかにしました。

4.「新言文一致体」の表記

「感情・評価を表す語」に片仮名表記が多用され、「程度や状態を表す語」には、非標準的な表記が表れていること、また、「文末部分の表記」には記号が多用されることについて、具体的な用例を示しました。

5.「新言文一致体」の本質

基本的に話し言葉の性質をもつ若者の書き言葉は、「思いつくまま話すように書く」ことで成立しています。考えて文章を作るのではなく、感じて文章を作っているので、その内容・表現は感覚的にならざるを得ません。それが、非標準的な表記を志向することになっています。

6.「新言文一致体」の展開―メール文体の発生

ケータイメールでのやり取りには、話し言葉と同じような表現や、絵文字や顔文字といった特殊な表記法に特徴がみられます。言語情報の不完全さを補い、感情や感覚をスムーズに伝達するこれらがもつ役割は、新言文一致体における記号の役割と同じです。20世紀末からのITの進化は「新言文一致体」を深化させたのです。

担当：佐竹 秀雄・岸本 千秋　2014年１月